

# ヴァンパイアの姫君

～よ にん ナイト四人の騎士とがく えん せい かつドキドキの学園生活!～

もちづき望月くらげ・作

あおの青野ユウ・絵



アルファポリスきずな文庫

## プロローグ

「私、決めた」……

6

## 第一話

夜月学園によくこそ

10

## 第二話

ヴァンパイアの姫君……

25

## 第三話

ひとり目の騎士……

42

## 第四話

幼なじみとの再会……

69

## 第五話

ひまわりみたいなお友だち……

90

## 第六話

僕があなたの騎士です……

101

## 第七話

私だけ、みんなと違う……

115

## 第八話

姫としての私と、騎士としてのあなた……

124

## 第九話

ひとりじゃない寂しさ……

136

## 第十話

優しい嘘と秘密の抜け道……

148

## 第十一話

幼なじみと友人との優しい時間……

157

## 第十二話

守られる理由、守りたい想い……

171

## 第十三話

秘密の夜の見回り……

187

## 第十四話

私は偽物ですか？……

205

## 第十五話

それでも私は、ここにいます……

227

## 第十六話

答えはまだ、胸の中……

238

## エピローグ

いつか、答えをあなたに……

243

あとがき……

252



あや せ なぎ  
**綾瀬 凪**

ナイト  
騎士のひとり。  
人形のように綺  
麗な顔をした後輩。

は やま けい  
**葉山 慧**

ナイト  
騎士のひとり。  
莉音の頼れる  
幼なじみ。

かざ ま はやて  
**風間 颯**

ナイト  
騎士のひとり。  
生徒会長を務め  
るクール男子。

いち の せ すばる  
**一之瀬 昂**

ナイト  
騎士のひとり。  
穏やかで優し  
い先輩。

がく えん ちやう  
**学園長**

莉音を夜月学園に呼び寄せた人物。  
ダンディで紳士なおじさま。

その べ ことり  
**園部 琴梨**

莉音のクラスメート。  
元気で明るい女の子。

このえり おん  
**九重 莉音**

母親のために夜月学園  
に転入した中学二年生。  
クロネコとコミュニケー  
ションが取れる。

**登場人物**

## プロローグ 「私、決めた」

ずっと、私のために頑張ってくれているお母さんに対して、自分ができることってなんだろうって思ってた。

ずっと、どうすればお母さんがやりたい仕事を、好きにだけできるんだろうって考えてた。

そんなことを考えながら、図書館からの帰り道をひとり歩いていると、草むらからクロネコが出てきて、私の足にすり寄ってきた。

「ふふ、どうしたの？ お腹空いたの？ でも、ごめんね。私、今はなにも持つてなくて」クロネコに謝りながら背中をなでてやると、気持ちよさそうに鳴いて、また草むらの中へ戻っていく。

気になって、クロネコが行ったほうを見ると、子ネコがいるのが見えた。どうやら、親ネコだったらしい。

子ネコがすり寄る姿に、可愛いなあという気持ちと、うらやましいなあという気持ちが混ざり合う。

最後にあんなふうに素直にお母さんに甘えたのは、いつだったかな。

もう忘れちゃったや。

寂しい気持ちをかかえながら家に帰ると、玄関にお母さんの靴があった。

「ただいま」

リビングのドアを開けると、食卓の椅子にお母さんが座っていた。

難しい顔をして、テーブルをじつと見つめている。

「お母さん？」

「あ、莉音。おかえりなさい」

「ただいま。大丈夫？ なんか疲れてるみたいだけど」

借りてきた本が入ったバッグをソファに置く私に、お母さんが声をかけた。

「莉音、ちよつとこつち来て」

「どうしたの？」

「いいから」

すぐに理由を話さないなんてめずらしいなあと思しながら、「はい」と返事をして食卓に向かう。

「座って」

真剣な顔でお母さんにそう言われて、私はおとなしく向かいの椅子に座る。

そこで初めて、机の上に通の封筒があることに気づいた。

封筒のあて名には『九重利音』様と、私の名前が書かれている。

「開けてもいいの？」

「……ええ」

お母さんはもう中身を見ていたらしく、封が開いていた。

中には真っ白な紙に、パソコンで打った文章。

「これって……」

手紙の差出人は『夜月学園 学園長』。

そして、びんせんにはこう書かれていた。

『夜月学園への入学を許可する』

夜月学園といえは、全寮制の中高一貫校として有名だ。

選ばれた一握りの人しか入学できない、超エリート校。  
卒業生はみんな、プロのスポーツ選手や政治家、有名な芸術家といったすごい人ばかりなんだって。

そんなところから、私あてに入学許可証が届くなんて、なにかの間違いに決まってる。

「——っ」

でも、ここなら。

全寮制の夜月学園に編入すれば、お母さんは私のことを気にせず仕事に打ち込むことができる。

今みたいに仕事をセーブして夕方に帰ってくることも、そのせいで夜中や休みの日にお仕事をする必要もなくなるんだ。

私のために頑張ってくれてるお母さんのために私ができること、見つけた！

「……お母さんは反対よ」

目を伏せて、お母さんは首を横に振る。

「……私、私——」

「私、決めた。夜月学園に転校する」

## 第一話 夜月学園によっこそ

バタバタと慌ただしく朝の準備をするお母さんに、私はキッチンから声をかけた。「お母さん、カバン忘れてるよ！」

「あつ、ありがと！ そうだ、お昼はこれでなにか適当に食べてね。それから——」

「宿題もちゃんとするし、出かけても夕方には帰ってくるから大丈夫」

昨日と同じ会話だなあと思いながら答えると、お母さんは心配そうな、それでいて安心したような表情を浮かべた。

「莉音がしつかりしてくれて助かるわ。なるべく早く帰ってくるからね」

「心配しなくても大丈夫だよ。それより、時間大丈夫？」

「大変！ 急がなくちゃ！ それじゃあ行つてくるね」

「はい、いつてらつしやい」

振り返ることなくリビングを出ていくお母さんに手を振つて、私はふうと息を吐き出

した。

鏡に映る前髪が寝癖ではねていることに気づいて、急いで直す。

「うん、これで大丈夫」

肩までの黒髪は、よく見るとちよつと茶色っぽい。先生から「染めてないのか？」って

聞かれることもあるけど、地毛なんだからしょうがないよね。

パーマをかけたみたいに毛先がクルクルしてるから、よけいに目を付けられちゃつてるのかも。

でも、身長が低いせいか、小学生に間違われやすいんだ。もう十四歳なのに！

このままじゃ、高校生になつても「どこの小学校？」なんて聞かれるかもつて不安だよ。お父さんもお母さんも身長高いのに、どうして私だけ……

壁に飾つた家族写真に写るお父さんとお母さんの姿を見ながら、私はため息をついた。

九重家はお父さんとお母さんと私の三人暮らし。といつても、お父さんはほとんど家に帰つてこない。

テレビ局でカメラマンをやつていて、全国各地を飛び回っているの。この間は秋田県のお土産が宅配便で届いたから、今は東北のほうを取材してるみたい。

お母さんは雑誌の編集者。でも、私がいるせいで仕事をセーブしてるんだと思う。夕方には家に帰ってきてくれるけど、その代わり夜中遅くまでリビングで仕事をしているから。

私がいなかったら、もつと思いつきり仕事ができるんじゃないかって……申し訳なくならないときがある。

「よし、やつちやおつか」

私にできるのは、ちよつとでもお母さんの負担を減らすことだけ。

昨日の夜からの洗い物を手早く終わらせると、夏休みの宿題に取りかかった。

「んー、お腹空いた」

集中してやったおかげで、数学の宿題は半分ぐらい終わった。今日はまだ七月三十一日だから、いいペースで進んでいる。

午後は国語のワークをしてもいいし、図書館に行ってもいいかもしれない。

でも、その前にお昼ごはん。

お母さんからもらった千円をおサイフに入れて、近所にあるお弁当屋さんに行こうつと。

夏休みが始まって最初の頃は、コンビニでカップラーメンを買ったり、ファストフード店に行ったりもしたけれど、毎日それでは飽きちやうんだよね。

それよりは、お弁当屋さんでいろんなメニューを試すほうが楽しいって気づいたの。

「今日はなににしようかな。昨日は竜田揚げ弁当だったから、今日はお魚かなあ」

ジリジリと暑い日差しを避けながらお弁当屋さんに向かっていると、困ったようにキョロキョロと辺りを見回しているおじいさんが見えた。

「どうしたんだろ？　なんかあったのかな？

あ、もしかして」

私はあることに気づいておじいさんに駆け



寄った。

「こんにちは。落とし物ですか？」

声をかけると、白髪のおじいさんが驚いたように顔を上げた。  
カッコいい……

おじいさんなんだけど、海外の俳優さんのような見た目をしている。その人は、被つていた帽子を取ると、眉を八の字にして苦笑いを浮かべた。

「そうなんだよ。歩いている途中でサイフを落としてしまったみたいでね」

「えっ、おサイフ？ 大変！ 私も一緒に探します！」

「いいのかい？ でも、お嬢さんもどこかに出かけるところだったんじゃない……」

「私はお昼ごはんを買いに行こうとしてただけだから大丈夫です。それより、早く見つけないと！」

困っているときはお互い様だしね。自分にできることなら協力しなくっちゃ。

おじいさんにおサイフの特徴を聞いて、私は草むらとか道ばたに落ちてないか探し始めた。

でも、どこにも見当たらない。

「どこにあるんだろう……」

「一緒に探してくれてありがとう。でも、これ以上迷惑はかけられないよ」

探し始めてから三十分が経つた頃、おじいさんは申し訳なさそうに言った。

「でも……!!」

「もしかしたら警察に届いているかもしれないから、交番まで行ってみるさ」

「そう、ですか」

優しい口調だけど、これ以上探す必要はないと明確に線を引かれた気がした。

たしかに、私がこれ以上探しても見つからないかもしれないけど——

「あっ、じゃあ、あとひとつだけ！ ひとつだけ試してみてもいいですか？」

「試すって、なにをだい？」

不思議そうに首をかしげるおじいさんに、私はニツと笑った。

「私、とっておきの力があるんです」

おじいさんと一緒に近くの公園に向かう。

ここは地域のネコたちがよく集まっている場所だ。だから、きつといるはず。

「あ、いた」

私はエサを食べているネコの中に、真つ黒な毛並みのネコを見つける。

「ネコがどうしたんだい？」

「ちよつと待つててくださいね」

私はクロネコの近くにしゃがみ、ジッと見つめた。

その視線に気づいたのか、クロネコがこちらを向く。

「こんにちは」

もちろん、ネコが「こんにちは」なんて返事をするはずがない。

それでも私は話しかけ続ける。

「あのね、おじいさんのおサイフがなくなっちゃったの。どこにあるか知らない？」

クロネコはまん丸の目で私を見つめ返す。

「大切なものなの。お願い、知ってたら教えて」

私の言葉に、クロネコは「にやあ」とひと鳴きして歩き出した。

「じゃあ、行きましょうか」

「どこにだい？」

「もちろん、おサイフのある場所にですよ」

ニツコリと笑ってみせると、おじいさんは目を丸くして驚いているようだった。

小さい頃から、どうしてかクロネコに懐かれることが多かった。私が歩いているとすり寄ってきたり、私のあとをついてきてみたり。

そばに寄つても逃げることはないし、話しかけたら「にやあ」と答えてくれる。迷子になつた私を、家まで連れて帰ってくれたことだつてある。

最初は偶然かなと思つていたけれど、今では自信を持つて言える。

私はクロネコに好かれているのだと。

だから、今もぎつと――

「あつ！」

何度か立ち止まり、私たちを振り返りながらクロネコがたどり着いたのは、公園の茂みの奥にある一本の木だった。

その木の上を見上げながら「にやあ」と鳴く。

クロネコの視線の先を追いかけると、木の中ほどにある枝に引つかかった、おサイフのよななものが見えた。

「あれですか？」

「ああ、そうだ！ 僕のサイフだ。だが、どうしてあんなところに」

「たしかに……。あ、もしかして」

先ほどから辺りに響く、カラスの鳴き声。

カラスは光りものが好きだと聞いたことがある。

「カラスが、おサイフのファスナーとか金具の光つてるところをくわえて、持っていたのかもしれない」

「ああ、なるほど。そうか、カラスか。盲点だったよ」

おじいさんは目を細めて木を見る。

そこには一羽の黒いカラスがとまっていた。

あのカラスがおサイフを持っていった犯人かもしれない。

「カラスさーん、おじいさんのおサイフ、返してください」

なんてダメ元で言ってみるけれど、カラスはまったく動かない。せつかく見つけたのに取れないなんて。

「どうしよう……」

「見つけてくれただけで十分だよ。本当にありがとうね。もう大丈夫だから」

「え、大丈夫って……」

言葉の意味を理解できずにいる私の隣で、おじいさんはカラスを見つめ、そして静かに言った。

「返しなさい」

その瞬間、カラスがバサツと動いておサイフをくわえて、木の枝からおじいさんの手の上に落とされた。

「すごい！ カラスと仲良しなんですか？」

「仲良しというわけでは……。いや、仲良しなのかな」

カラスを見ておじいさんは小さく笑う。

その優しい表情に私はホッとした。カラスを見ていたときのおじいさんは、どうしてかすごくすごく怖く見えただけど、見間違いないかな。

「それじゃあ、今日はありがとう」

ふたりに公園の入り口まで戻ると、おじいさんは深々と頭を下げた。

「私はなにもしてないですよ。探してくれたのはクロネコです」

私の言葉に、おじいさんは柔らかな笑みを浮かべる。

「お礼をしたいから、名前を教えてもらえるかい？」

「私は九重莉音です。でも、本当にお礼なんていらなから」

「莉音さんだね。今日は本当にありがとう」

おじいさんがそう言った直後、強い風が吹いてきて、私は思わず目を閉じる。次に目を開けると——そこにはもう誰の姿もなかった。

まるで風にさらわれたかのように、おじいさんは消えてしまっていた。

それから二週間後、私の家に一通の封書が届いた。

それは、県内にある『夜月学園』への入学許可証。

夜月学園は全寮制の中高一貫校で、全国から応募が来るけれど、選ばれた一握りの人しか行けない超エリート校だ。

入学資格は公表されていないので、入学許可証が届いた人以外は入れない。受験をするわけでも、校区分けで入学できるわけでもない不思議な学校。

卒業生には有名な学者や政治家、弁護士さんなんかがたくさんいるんだって。前にテ

レビで『世界のエリートのうち三割は夜月学園の卒業生だ』って言っていた。

しかも学力だけじゃなくて、プロのスポーツ選手や有名な芸術家、世界で活躍する歌手もいるとか。

その夜月学園への入学許可証が今、私の目の前にある。

正しくは、私とお母さんが向かい合って座る食卓の上に、だ。

そんなすごいところから、私あてに入学許可証が届くなんて、なにかの間違いだと思ふ。

でも、目の前にある封筒には、はっきりと私の名前が書かれていた。

「莉音、申し込みとかけたの？」

「してないよ！ どこからするのかわかんないのに」

「そうよね……。でも、どちらにしてもお母さんは反対よ。夜月学園って全寮制の学校でしょ？ そんなところから莉音を行かせるなんて、絶対にダメです」

この話は終わりとばかりにお母さんは立ち上がる。

「久しぶりに早く帰れたんだから、こんな話はやめにしてごはん食べましょ。莉音、なにか食べたいものはある？ せっかくだから——」

「お母さん、私、行きたい」

私がそう言うとお母さんは一瞬動きを止め、それから笑った。

「そうね、外に食べに行くのもいいわね。焼肉とかラーメンとか……」

「そうじゃなくて。私、夜月学園に行きたい」

「……どうして」

お母さんが悲しそうな顔で私を見る。その表情を見て、胸の奥がギュッと痛くなる。でも、私は知っていた。

私がいるせいで、お母さんが仕事をセーブしていることを。

ずっと、どうすればお母さんが我慢しなくてよくなるかを考えていた。まだ中学生の私には、家事を手伝うくらいしかできることがなかったけれど。

でも――

私のために頑張ってくれてるお母さんのために私ができること、見つけた！

「前から興味があったの。どんなところかなって」

理由を正直に言えば、たぶんお母さんは「そんなことないわ」って否定すると思う。きつと自分のやりたいことよりも、私を優先する。

「こんなチャンス、もうないよ！ 私のために  
かの才能を見つけてくれたのかもしれない」  
お母さんは「仕事のことは大丈夫、気に  
しないで」って言うってくれるけど、でも私  
だって、お母さんにやりたいことを全力で  
やってほしい。

「だから、夜月学園に転校させてください！」

「……転校したら、長期休み以外はよほどの  
ことがないと家に帰ってこれなくなるの  
よ？」

「わかってる」

「お母さんと会えなくて、寂しくない  
の……?」

「そ、それは……」

思わず言葉に詰まってしまう。



寂しくないわけがない。お母さんとずっと一緒にいたい。でも……！

「寂しく、ないよ」

嘘をついた私の目をお母さんはまっすぐに見つめる。

嘘を見透かされるのが怖い。

だけど、ここで逃げたらきつとお母さんは今までの……ううん、これからも私のために自分の時間を当たり前のように使ってしまう。

それだけはいやだ。

そう強く思いながら見つめ続けていると、先に目を逸らしたのはお母さんだった。

「……わかった」

「ホント？」

「ええ。あなたの人生だから、あなたの好きにきなさい」

寂しそうなお母さんの表情に、本当にこの選択が正解だったのか不安になる。

でも、もう決めたんだ。

私はお母さんが自分の好きなことを思いつきりできるように、夜月学園に転入するつて。

## 第二話 ヴァンパイアの姫君

夏休み明けに夜月学園に転入すると決まっていたから、あつという間だった。

全寮制なので引越しの準備と、新しい制服の採寸、元々通っていた中学校に置いていた荷物を取りにも行った。

担任の先生は転校を残念がっていたけれど「新しい学校でも九重さんなら大丈夫」と背中を押してくれた。

友だちに転校することは伝えられなかった。でも、お別れを言ったら寂しくなって泣いてちやいそうだったから、これでよかったのかもしれない。

「降りるわよ」

窓の外の景色を見ながらいろんなことを考えていると、お母さんが私の肩を叩いた。慌ててバスを降りた瞬間、制服のスカートがくるんとひるがえる。

今まで通っていた中学校の制服はシンプルなセーラー服だったが、夜月学園は水色

のワンピースだ。大きな白い丸襟に、腰のところにはベルトがついていて、初めて着たときはあまりの可愛さに、鏡の前できやーきやー騒いじやった。

お母さんは制服を見ながら、「さすが私立ね……」と感心したように言っていたわけ。「疲れたね」

「ちよつと遠かったものね」

伸びをして大きく息を吸うと、森の中の澄んだ空気が気持ちいい。

自宅のある市から電車とバスを乗り継いだ先に、夜月学園はあった。

「すごい……」

夜月学園の門の前に立つと、その大きさに圧倒される。でも、大きいのは門だけじゃない。

門の向こうには、中世ヨーロッパの建物のような石造りの校舎が見えた。灰色の石壁に蔦が絡まっついていて、学園の長い歴史を感じる。

校舎の真ん中には、大きな時計塔が空に向かってそびえ立っていた。こちらも古そうだ。ここで、今日から過ごすんだ。

そう思うと、ドキドキするような、でも不安なような複雑な気持ちになる。

「それじゃあ……お母さんはここまでしか行けないから」

そう言いながら、お母さんは心配そうに私を見た。

夜月学園の規則で、学園内は保護者は立ち入り禁止だ。それもあつて、転入の手続きはすべてオンラインだった。

「荷物はどう寮に届いてるそうよ」

「うん、大丈夫」

いつもならとくに仕事に行っている時間なのに、今日は私の転入の日だからと、お母さんは半休を取って学園まで付き添ってくれた。

でも、さつきから何度もお母さんのスマートフォンがバイブ音を響かせている。

「じゃあ、お母さん。またね！」

「……莉音」

門をくぐろうとした私を、お母さんがギュッと抱きしめる。

「寂しくなったりつらくなったりしたら、いつでも帰ってきていいんだからね」

「……っ」

そんなことを言わないでほしい。せつかくの決意が揺らいでしまう。

それに、私は知っていた。明日から、お母さんが県外に出張に行くことを。たくさんの方がお母さんを待っていることを。

私がいなくなつて清々する、とは思っていないだろうけれど、私がいなくなること、お母さんの仕事に制限がなくなることはたしかだ。

「……大丈夫だよ！　じゃあ、いつてきます！」

お母さんの身体を押しつけるようにして笑顔を見せると、私は夜月学園の門をくぐつた。振り返ることは、しなかつた。

「えつと、まずは事務室に行けばいいんだよね」

入学案内の紙に書かれた内容を確認しながら、私は校舎へと足を踏み入れた。

中は外観ほど古めかしい感じはしなくて、とても清潔で綺麗だ。どこかお城に迷い込んだような気持ちになる。

「あ、あの……」

入り口のすぐそばにあつた事務室に近づいて声をかけると、中にいたおじさんが私のほうを見た。

「ああ、転校生かな」

「は、はい」

「そんなに緊張する必要はないよ」

事務員のおじさんは柔らかに微笑むと、私に一枚の紙を渡した。

「九重莉音さんだね。これが寮の部屋番号。荷物は届いているけど……ああ、そうだ。先に学園長室に来てもらうようにと言われていたんだった」

「学園長室ですか？」

不思議に思いつつも、入学許可証に学園長の名前が書かれていたのを思い出した。ちやうどいい、入学を許可してもらつたお礼を伝えよう。

「わかりました」

校内の案内図を受け取り、私はうろうろとしながら学園長室へ向かつた。

「ここ、かな」

やがてたどり着いた部屋には、ひととき重厚な扉の上に『学園長室』と書かれたプレートがかかつていた。

ノック、したほうがいいよね……？

辺りを見回しても自分しかないのです、誰かに頼んで一緒に入ってもらうこともできない。

ゴクリと呑み込んだつばの音が、やけに大きく耳の奥で響く。

コン、コンと震える手でノックをすると、中から『どうぞ』という男の人の声が聞こえた。

「し、失礼します」

重いドアを開けて中に入ると、ソファーとテーブル、その奥のデスクに男性が座っていた。

「え……？」

「やあ、久しぶりだね」

真っ白なスーツに真っ赤なシャツ。デスクにひじをつけて手を組み、こちらを見るその人の顔には見覚えがあった。

「おサイフをなくした、おじいさん？」

「覚えていてくれたんだね。うれしいよ」

「ど、どうしてここに？ え、そこ、学園長先生の席ですよ？ 座っちゃって大丈夫で

すか？」

混乱する私に、そのおじいさんはおかしそうに笑った。

「大丈夫。私とその『学園長』だからね」

「おじいさんが？ 嘘……」

嘘もなにも、その席に座っているのがなよりの証拠なのだけだ。

でも、おサイフをなくして困っていたおじいさんと、夜月学園の学園長が同一人物だなんてうまく頭の中であたかもつながらない。

「え、なんで、どういう……？」

「順を追って話すから、まずはそちらに座りなさい」

ソファーに座るようにうながされ、私は戸惑いながらも腰を下ろす。

家のものとは比べものにならないぐらいソファーはふかふかで、沈んでしまいそうになる。

学園長はテーブルを挟んだ向かいのソファーに座ると、柔らかな笑みを浮かべた。

「それじゃあ改めて、九重莉音さん……いや、姫。我が夜月学園へようこそ。我々はあなたの入学を心より歓迎いたします」



「ひ、姫っ？」

「思いも寄らない呼ばれ方をされて、つい声が裏返ってしまった。」

「だって、今、姫って……私のこと『姫』って言ったよね？ いやいやいや。」

「私、姫なんかじゃありません。普通の、ただの女の子で——」

「いや、そんなことはない。あなたは我々『ヴァンパイアの姫君』だ」

「だから違うって……え？ 我々『ヴァンパイア』……？」

「ヴァンパイアって、あの漫画とかアニメに出てくるヴァンパイアだよな？」

「日本語で言うところの『吸血鬼』。」

「人間の血を吸って生きて、太陽の光とニンニクと十字架が苦手っていう、あの『ヴァンパイア』……？」

「……？」

「——ふ、ふふつ。わかりました。これ、転入生にするドッキリかなにかですね？」

「ん？ どうしてそう思うんだい？」

「だって、ヴァンパイアなんているはずないですもん。こうやってビックリさせて、みんな『ドッキリでした！』って転入生をおどろか、せる……」

「私は最後まで言い切ることができなかった。」

目の前に座る学園長の目があまりにも真剣で、嘘をついているように見えなかったから。  
「あ、の……」

「ヴァンパイアはいるよ」

「そんな、はず——」

「その証拠に、この学園に通う生徒はみんなヴァンパイアだ」

「みんな、ヴァンパイア……?」

その瞬間、学園長室の窓の向こうをコウモリが横切った。

それも一匹や二匹じゃない。何十匹ものコウモリたちが。

「きやつ」

「大丈夫。彼らは悪さはしない。みんなうちの生徒たちだからね」

「今のが、生徒……?」

なにがどうなっているのかわからない。

つい数十分前まではお母さんと一緒にバスに乗っていて、普段となにも変わらない日常だったのに、どうして、こんな……

「ここはね、ヴァンパイアの子どもたちのための学園なんだ」

「嘘……」

「嘘じゃないさ。さつき君はヴァンパイアなんていないって言ったけれど、どうしてそう思う?」

「だ、だって、ヴァンパイアが本当にいたら、今頃ニュースになってるはず……」

今までそんなニュースを見たことも聞いたこともない。

おそろおそろ言う私に、学園長は意味深に笑った。

「大事なことがすべてニュースになるとは限らない。ヴァンパイアが存在は、各国の政府は把握しているよ。けれど、情報がオープンになるとイタズラに不安をあおってしまう。だからみんな秘密にしているんだ。人間たちが平和に安心して暮らせるようにね」

学園長の言葉はわかるようで難しく、全部は理解できない。

「ここはそんなヴァンパイアの子どもたちを教育する場所だよ。普通の学校に入学すれば正体がバレる可能性が高いからね。特にその能力が開花するとされる、十三歳以降はね」

「もしかして、夜月学園の卒業生に優秀な人が多いのは、みんなヴァンパイアだから……?」

「そうだね、普通の人間より高い身体能力を持っている。とはいえ、目立ちすぎないよう

に調整しているけれどね。全力を出せば人間なんて——」

学園長はそこで言葉を止めた。

続きが気になるけれど、聞くのが怖い。

でも、もし本当にここがヴァンパイアの子どものための学校なのだとしたら。

「わ、私は、ヴァンパイアじゃ、ありません」

震える声で必死に伝える。

私に入学許可証が届いたのはなにかの間違いだつて、自分はこの場所にいられるような存在ではないんだつて。

「このことは、誰にも言わないです。だから……」

「君は『ヴァンパイアの姫君』だ」

「姫君つて……私は、普通の人間で……」

「クロネコと言葉を交わすなんて普通の人間にはできないと思うが、どうだろう？」

「そ、それは」

たしかに、私はクロネコに思いを伝えることができる。でも、それだけだ。

「会話なんてしていません。私には、クロネコの声は聞こえません」

「ああ、そういうことか。かわいそうに。彼の言葉は届いていなかったんだね」

「え……？」

どういう意味かわからなくて首をかきあげた私に、学園長は言う。

「あのとき、君の呼びかけに彼——あのクロネコは返事をしてたよ。『わかりました、姫君』つてね。きつと今までも君の言葉に応えていたんじゃないかな」

「嘘……」

そんなこと、あるはずない。

そう思おうとするけれど、あのとき『にやあ』と鳴いたクロネコの姿が頭をよぎる。

あれは、私に返事をしてくれたの……？

「『ヴァンパイアの姫君』はクロネコと心を通わせることができる。つまり君は、間違いなく『ヴァンパイアの姫君』なんだ」

否定する隙もないぐらいハッキリ言い切られてしまい、私は言葉に詰まった。

そんな私に、学園長は畳みかけるように話を続ける。

「さて、この学園にいる生徒はみんなヴァンパイアだと言ったが、今日からひとり例外が生まれる。それが姫、君だ」

「どうして……」

「何十年、いや何百年に一度というときもあるが、稀に人間界に『ヴァンパイアの姫君』と呼ばれる女の子が生まれる。すると、ヴァンパイアの世界には姫君を守る四人の騎士と呼ばれる少年が誕生するんだ」

「騎士……」

まったく理解が追いつかない。

「そうだ。姫には、その四人の中からひとり『血の契約』を結ぶ者を選んでもらいたい」

「『血の契約』ってなんですか……?」

「姫と騎士が結ぶ契約だ。騎士は絶大な力を手に入れることができ、その代わり永遠に姫を守り続けるという契約だ」

「そんな契約……」

騎士の人は契約を結べば力が入るから、いいかもしれない。

でも、私になにか得があるとは思えないよ。

「永遠に守るなんて言われたって、現代の日本でいつたいなから守るっていうの——」

「……まさか」

「頭の回転が速いようだね」

とつさに呟いた私を見て、学園長は静かに頷いた。

「力があるということ、それを狙う者もある。姫が『ヴァンパイアの姫君』だと知れば、どんな手を使ってもその力を我がものにしようとしたり、姫の立場を利用して考えたりする者が出てくるだろう。そういう者から君を守るのも、騎士たちの役目だ」

「私を利用してしようとする……それは、私の大切な人を使つて、ということもありますか?」

「あり得ないとは、言い切れないな。姫の大切な人が捕らわれれば、相手の言うことを聞くしかない——そう考える者がいても不思議じゃないだろう」

「そんな……!」

自分が『ヴァンパイアの姫君』だつて話もまだ信じられないのに。

「私のせいでお父さんやお母さんに迷惑が——ううん、危険が及ぶ可能性があるなんて言われても、どうしたらいいのかわからない。」

「……違うと思います」

「ん?」

「私は、たぶんその『ヴァンパイアの姫君』じゃありません」

「僕の話信じられないと言うのかい？」

「……はい」

学園長の話がというよりは、ヴァンパイアの存在を信じることができない。

だって、こんなの「おぼけてるんだよ」って言われてるようなものだもん。ううん、それよりも信じられないかも。

ヴァンパイアなんて狼男とか透明人間とかと同じ、絵本の中の生き物だよ。

「まあ、急にヴァンパイアがいるなんて言われても、信じられないのも無理もない。だが、この学園で過ごすうちに自然と理解するよ。彼らが君とは違う生物だよ」

「この学園で……。私は人間です。ヴァンパイアの学園になんて——」

「ヴァンパイアの存在を信じないのであれば、君にとってこの学園にいる生徒たちはみな人間ということになる。それならここにおいても問題ないだろう？」

「それ、は」

そう言われてしまうと、なにも言えない。

「今日から君も我が夜月学園の一員だ。歓迎するよ」

歓迎してくれるのはありがたいけれど……

学園長が話した内容が、頭の中をぐるぐると回る。

この話が本当だとすると、ここはヴァンパイアの子どものための学園で、私は『ヴァンパイアの姫君』で、姫には騎士と呼ばれる四人の少年がいるってことで——ううん、やっぱりそんなの信じられない。

こんな漫画みたいな話があるわけないじゃない。

「詳しく話を聞きたくなったら、もう一度ここに来なさい」

なぜか学園長の言葉が、必ずそうなるという予言のように聞こえた。

### 第三話 ひとり目の騎士

私は学園長室を出たあと、今度こそ寮へ向かった。

本来であれば二年生はふたり部屋らしいのだけど、ヴァンパイアと人間を同室にするのはよくないだろうという配慮のもと、私はひとり部屋になったんだって。

ただ単に、ふたり部屋が空いてなかっただけかもしれないけれど。

でも、この生徒がみんなヴァンパイアだなんて、そんなこと本堂にあり得るの……？ 学園長は当たり前のようにヴァンパイアがいるっていう前提で話をしていたけど、私はまだ信じ切れていない。

「『学園内での吸血行為は禁止します』って、嘘でしょ……」

普通の学校には絶対にならない看板に、思わず私は呟いた。

これ、きつと、なにかのイベントのときに立てた看板なんだ。それを片づけるのを忘れてただけで。うん、そうに決まってる。

どうしても信じられない私はそう気を取り直して、寮を目指して歩く。

寮は学園の中庭を挟んで東が高等部、西が中等部となっているらしい。中庭に出た私は、辺り一面に広がる花々に足を止めた。

「すごい……」

美しすぎて、まるで絵画の中に吸い込まれたみたいな気持ちになる。

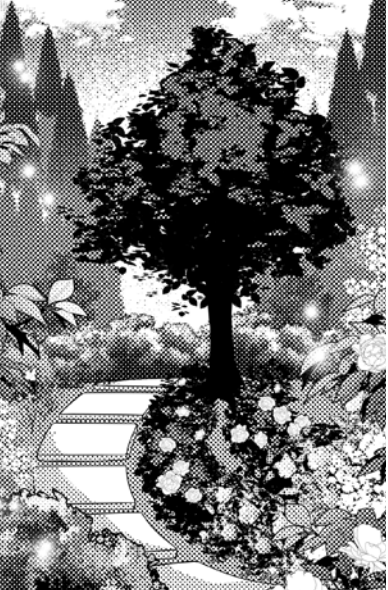
さっきの話を聞いていなければ、もつとわくわくした気持ちでこの場所に立てたかもしれないけれど。

「どっちに行ったらいいの……？」

寮へつながる道を探していると、たくさん花の向こうに左右に分かれる石畳の通路を見つけた。

「西が中等部だから……えつと、西？」

北が上なら、左手の方向が西だよ。そもそもどつちが北なのかまったくわからない。せめて中等部はこちらとか書いておいてく



ればいいのに、そんな標識もなかった。

「えええ、どつちに行けばいいの？」

もう一度、学園長室か事務室に戻って、どつちですかって聞いてこようか。なんでさつきちんと確認しなかったんだって言われるかな。

それに『詳しく話を聞きたくなら、もう一度ここに来なさい』って言っていたから、今戻ればさつきの続きを聞かなくちゃいけないかもしれない。

「あ、そうだ」

ふと、いいことを思いついた。

今日まで夏休みだけど、私以外に部活とか勉強とかで学園に行ってる人もいるはずだ。

その人が寮に入っていくのを見て、どちらが中等部なのか判断すればいい。中学生と高校生なら見た目でわかると思うし。

我ながらナイスマイデアだ。

それなら、誰か来るまで花を見ているふりでもしておこうつと。

そう思つて、私は近くに咲いていた花のそばにしゃがんだ。しばらくすると、後ろから誰かの足音が聞こえてきた。

こつそりと足音がしたほうへ顔を向けたとたん、私は思わず声を上げそうになつて慌てて口を両手で押さえる。

視線の先には、アイドルの男の子と同じぐらいカッコいい男の子がいた。

スラリと高い身長に、キリツとした目元、それからこりともしないクールな口元が素敵だ。

薄い水色の半袖シャツにグレーのスラックスは、夜月学園の男子の制服だった。入学案内に写真が載っていたので間違いない。

あんなカッコいい人がいるなんてと、つい見とれた。

だから、いつの間にかすぐ近くに蜂が飛んできていることに気づかなかつた。

「ぎやつ」

突然、目の前に現れた蜂にビックリして、そのまま尻餅をついてしまう。

「いたた……」

「大丈夫か？」

「はっ、はい！」

男の子は私に近寄り、手を差し伸べてくれた。

「あ、あの……」

「いつまでもそこに座<sup>すわ</sup>っていたいなら別<sup>べつ</sup>だけど」

「どうやら私<sup>わたし</sup>を起<sup>おこ</sup>こそうとしてくれていたみたいだ。

「ただ、私<sup>わたし</sup>が戸惑<sup>とまど</sup>っている間に、差<sup>さ</sup>し出<sup>だ</sup>された手<sup>て</sup>が引<sup>ひ</sup>つ込<sup>こ</sup>められてしまった。

「彼はなにが言<sup>い</sup>いたそうな顔<sup>かお</sup>で私<sup>わたし</sup>を見<sup>み</sup>下<sup>お</sup>ろしたあと、黙<sup>だま</sup>ったまま左<sup>ひだり</sup>手のほうへ進<sup>すす</sup>んでいく。

「そっちが西<sup>にし</sup>なのか東<sup>ひがし</sup>なのかはわからない。でも、もしかしたら中等部<sup>ちゅうぶ</sup>の生徒<sup>せいと</sup>かとも思う。

「大人<sup>おとな</sup>つぼく見えるけど、高校生<sup>こうこうせい</sup>ではない気がするし。

「待<sup>ま</sup>って！」

「なに」

「大慌<sup>おおあわ</sup>てで駆<sup>か</sup>け寄<sup>よ</sup>ると、彼<sup>かれ</sup>は面倒<sup>めんどう</sup>くさそうな視線<sup>しせん</sup>を私<sup>わたし</sup>に向<sup>む</sup>ける。

「あ、あの、私<sup>わたし</sup>、今日<sup>けふ</sup>中等部<sup>ちゅうぶ</sup>に転校<sup>てんこう</sup>してきて、それで……」

「ああ、君<sup>きみ</sup>が転校<sup>てんこう</sup>生<sup>せい</sup>か」

「私<sup>わたし</sup>が来<sup>く</sup>ることを知<sup>し</sup>っていたような口振<sup>くちぶ</sup>りで言<sup>い</sup>うと、私<sup>わたし</sup>のほうを向<sup>む</sup>き直<sup>なお</sup>る。

「俺<sup>おれ</sup>は風間<sup>かざま</sup>颯<sup>はつ</sup>だ。中等部<sup>ちゅうぶ</sup>の生徒<sup>せいと</sup>会長<sup>かいちょう</sup>をしている」

「生徒<sup>せいと</sup>会長<sup>かいちょう</sup>、という言葉<sup>ことば</sup>を聞<sup>き</sup>いて私<sup>わたし</sup>はホツとした。

「この人<sup>ひと</sup>に寮<sup>りょう</sup>の場<sup>ば</sup>所<sup>じょ</sup>を聞<sup>き</sup>けばわかるってことだよね。

「でも、生徒<sup>せいと</sup>会長<sup>かいちょう</sup>ということは二年生<sup>にねんせい</sup>かな。前<sup>まえ</sup>の学<sup>がく</sup>校<sup>こう</sup>でも、二年生<sup>にねんせい</sup>の夏休<sup>なつやす</sup>み前<sup>まえ</sup>には新<sup>あたら</sup>しい

「生徒<sup>せいと</sup>会<sup>かい</sup>の選<sup>せん</sup>挙<sup>きょ</sup>が行<sup>おこな</sup>われてたもんね。

「同じ<sup>おな</sup>じク<sup>く</sup>ラスの子<sup>こ</sup>が生徒<sup>せいと</sup>会<sup>かい</sup>長<sup>ちやう</sup>に当<sup>あた</sup>選<sup>せん</sup>して、初<sup>はつ</sup>挨拶<sup>あいさつ</sup>で盛<sup>せい</sup>大<sup>だい</sup>に囁<sup>ささ</sup>んでいたのを思<sup>おも</sup>い出<sup>だ</sup>して、つ

「い笑<sup>わら</sup>ってしま<sup>ま</sup>いそ<sup>そ</sup>うになる。

「どうした？」

「あ、う、ううん」

「風間<sup>かざま</sup>くんはたぶん同<sup>どう</sup>い年<sup>ねん</sup>なの<sup>どし</sup>に、かな<sup>か</sup>なり大<sup>お</sup>人<sup>と</sup>つ<sup>つ</sup>ばい。

「いまだに小<sup>しょう</sup>学<sup>がく</sup>生<sup>せい</sup>と間<sup>ま</sup>違<sup>ちが</sup>われる私<sup>わたし</sup>とは正<sup>せい</sup>反<sup>はん</sup>対<sup>たい</sup>だ。

「中等部<sup>ちゅうぶ</sup>の人<sup>ひと</sup>がいてよかつた！ 私<sup>わたし</sup>、このあ<sup>あ</sup>と寮<sup>りょう</sup>に行<sup>い</sup>く予<sup>よ</sup>定<sup>てい</sup>だつた<sup>ただ</sup>けど、どつちに

「行<sup>い</sup>つたらいいかわか<sup>か</sup>なく<sup>く</sup>なつちやつて」

「笑<sup>え</sup>顔<sup>がほ</sup>で話<sup>わ</sup>す私<sup>わたし</sup>に、彼<sup>かれ</sup>は呆<sup>あき</sup>れたよ<sup>よ</sup>うな目<sup>め</sup>を向<sup>む</sup>けた。

「中等部<sup>ちゅうぶ</sup>は西<sup>にし</sup>だと言<sup>い</sup>われなかつたか？」

「言<sup>い</sup>われたけど……地<sup>ち</sup>図<sup>ず</sup>がないと、どつちが西<sup>にし</sup>でどつちが東<sup>ひがし</sup>かわか<sup>か</sup>なく<sup>く</sup>て」

「あり得<sup>え</sup>ない」

言い捨てると、風間くんは私を置いて歩いていく。

「ちよ、ちよつと待って……っ」

置いていかれないように、反射的に風間くんの手をつかんだ。

その瞬間、今まで感じたことのない不思議な感覚が身体の中を走った。

熱いつ！

まるで淹れたてのココアを飲んだときみたいな熱さが、風間くんの手から流れ込んでくる。

「あ……っ」

風間くんも驚いたような表情を浮かべる。

その目は銀色に光っていた。

「……うっ」

風間くんは空いているほうの手で首元を押さえた。まるで、そこになにか熱いものが触れたかのように。

パツと触れていた手を離すと、沸騰しそうなほどの熱がスツと引いていく。

熱を失った身体はどこかぼつかりと穴が空いたように寂しくて、心細い。

「今の、いったい……」

風間くんもきつと混乱しているはずだ。そう思っ彼を見ると……

瞳の色は元に戻ったけれど、熱に浮かされたような目を私に向けていた。そしてなんと、その場にひざまずく。

「姫」

「な……」

「姫が来るのを、ずっと、ずっと待っていた」

「姫って……まさか……」

ふわりと風が吹き、風間くんの髪の毛がゆれる。首筋に赤い三日月の形のアザがあるのが見えた。それに薦のようなものが絡みついている。

そのアザに見覚えなんてないのに、心の奥がざわつくのを感じる。

私は、あのアザを知っている。

「俺は、あなたの騎士だ」

「風間くんが、私の騎士……」

ああ、やつぱり。

## 立ち読みサンプルはここまで



「ずっと恋い焦がれていた。もう二度と、あなたのそばから離れないと誓う」  
そう言ったかと思うと、風間くんは私の手を取って——手の甲にキスをした。

ああ、ダメだ。

この想いには抗えない。

違うって言いたいのにな、私は普通の人間だって思いたいのにな、身体に流れる血が、私が『ヴァンパイアの姫』なのだと告げてくる。

自分の騎士を、風間くんを本能が求めている。

動くことさえできないまま固まっている私を見て、風間くんがふつと笑った。

「顔が真っ赤だな」

「あ、当たり前でしょ！ だって、今——」

「嫌だったか？」

「それ、は」

嫌か嫌じゃないかで言えば、嫌じゃ、なかった、けど……

「ドキドキするから、ダメ……」

「姫は可愛いな」

「可愛いじゃない！ それから、その姫って呼び方やめてもらっていい？」

姫と呼ばれるのがとにかく恥ずかしくて、くすぐりたい。

それに、私自身を見てもらえていない気がするから。

「なら、なんて呼べばいい？」

「莉音でいいよ」

「莉音か。いい名前だな」

まっすぐ私を見て言われると、もつとドキドキしちゃう。